



【教育目標】 自ら学び正しく判断して行動する国際性豊かな児童生徒の育成  
~~~~ 一人一人が輝く子どもの姿を求めて ~~~~

☆2・3月の目標

☆3つの「あ」

- ※あいさつ
- ※あんぜん
- ※あとかたづけ

☆配布物のお知らせ

・学校便り50号

☆今後の主な予定

- ・3月25日卒園式・卒業式 修了式
- ・4月 8日始業式、入園式 入学式

☆六年二組 冬の俳句

冬になり みんなで作る 雪だるま  
雪だるま かなしきり 江泉 大和  
冬の朝 誰が見ても 金田光太郎  
年変わり 外は寒くて 小松大空  
年初め 年賀状書き 永幸 蒼士  
冬休み ニートがふえて 前村 康介  
冬になり ナットクラッカーで 村上雄一郎  
ハレエする イレレジ愛子

年越しは テレビを見ながら  
こたつおわり 滝本愛里来

お年玉 かわいい絵見て きれいだな  
七福神 みんな福耳 ベネットエイジ  
ねぼうして 今年のがした 山内 萌杏  
山本 初日の出 夏鈴



☆一年三組

いま がんばっていること  
まつもと れみ  
いま、いちばんがんばっていること  
とは、ピアノです。わたしのおねちゃ  
んも、いっしょにピアノをやっています。  
しゃくだいのきよくを  
たくさんれんしゅうして、  
もっとうれいなく  
なりたいです。



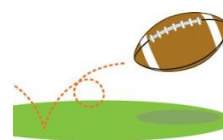
☆一年三組

いま がんばっていること  
田川 有紗  
わたしは、ピアノをがんばっています。  
ます。おかあさんは、いいねっています。  
つもいっています。おとうさんもこ  
どものとき、ピアノをならいました。  
わたしのせんせいは、  
きょうこせんせいです。  
レッスンは、たのしいです。  
とてもいいせんせいです。



☆二年三組 冬をかんじることは

さいとう みのり  
ラクビーは、冬にたいかいをする  
スポーツです。つかうボールは、丸く  
ありませぬ。ボールの形は、だ円形  
の形をしています。一つのチームの  
人数は、十五人います。  
ボールをもって  
グラウンドの一番  
はじっこにボールを  
つけたら点すうが  
はいります。



☆二年三組 冬をかんじることは

はま田 りの  
わたしは、おでんを食べると冬が  
来たんだなあとおもいます。  
なぜかというと、冬は寒いので、  
あたたかいおでんを食べると  
体があたたまるからです。



☆二年三組 冬をかんじることは

ふじ本 さくら  
わたしは、夏に日本に帰った時に  
七五三のおまいりに行きました。  
七五三が冬のものだと知ってびっ  
くりしました。たしかに、  
夏にきものでじんじや  
に行ったらあついで、  
冬に行ったら方がよい  
と思いました。



☆一年三組

いま がんばっていること  
よしとみ れん  
ほくは、いま、あるく れんしゅう  
をしています。  
どうしてかというと、ふゆやすみ  
にスノボにいったからです。  
あしのほねをおったからです。



わたしは、冬休みにダンボールで子どもがのれるバスを作りました。バスの名前は、「友だちバスめいポリス」です。一ばんやくにたつのは、トランクです。どうしてかという、いっぱいものが入れるからです。ワイパーはまがる。ストローで作りました。本ものみたいにうごきます。じょうずにできてるうれしかったです。おとうさんとおかあさんにほめてもらって、うれしかったです。



今日、海へ行きました。クリアウオータービーチです。パパが、「海に行こうよ」と言うので、海に入りました。入ると水がつかめたかったです。貝がいたかったです。だから、貝がすぐ出ました。貝がらをひろいました。おとしあなもつくりました。あとママと力二をすなで作りしました。たのしかったです。



第16回 東和エッセイストコンテスト「在ニューヨーク総領事館賞」

「夢を現実に」 高校生部門

インディアナ日本語学校

茂木 柚伽

夢と現実。この二つはそう簡単に結びつかない。今、世界共通の大きな夢は「平和」だろう。しかしこの「平和」という夢は、現実から遠く離れている。「平和」な世界は、いつでも私達の夢でありながら、実現するのは困難である。私が考える「平和」とは、世界中にいる全ての人々が安心して笑顔でいられる状態である。それを実現する一つのあり方が「核兵器の無い世界」だ。しかし、世界から核兵器をなくせる可能性は低い。合衆国、英国、ロシア、仏国、中国、インド、パキスタン、朝鮮民主主義人民共和国、と現在これほどの国々が核兵器を保有、又は保有を表明しているからだ。「核兵器の無い世界」を創るにはどうしたら良いのか。「核兵器の無い世界」を目指す人間の一人として、自分に出来る事一つ一つに全力を尽くしたい。

私を含め日本の中高生は、核兵器、即ち戦争や平和に関心をもっている人が少ないかもしれない。しかし、日本人は「核兵器の無い世界」を創るのにあたって重要な役割を果たす事が出来る。核兵器は、第二次世界大戦中に合衆国が原子爆弾を日本の広島県と長崎県に投下した以外、実戦では使用されていない。そのため、その核兵器による攻撃で生まれた被害の大きさを、私達日本人は世界の人々に伝えていかなければならない使命がある。私はこの夏、インディアナ日本語学校で学習している現代社会の課題で、日本と合衆国の第二次世界大戦をめぐる両国の歴史認識の違いを調査した。そこでは、教育内容に大きな違いが見られた。その最たる例は、原子爆弾の投下による死者数である。日本の教科書には、広島に投下した原子爆弾による死者数が二十万人、長崎に投下した原子爆弾による死者数が十四万人と書かれているのに対し、合衆国の教科書には、広島に投下した原子爆弾による死者数が八万人、長崎に投下した原子爆弾による死者数が四万人と書かれていた。合衆国の中高生には、日本で広く知られている死者数の半分以下の数字で、その被害の大きさが伝えられていたのだ。正直、非常に驚いた。しかしこれは、合衆国が自分達の投下した原子爆弾による被害を抑えようとしたわけでも無ければ、日本が原子爆弾による被害を誇張したわけでも無い。そもそも原子爆弾の被害に対する理解の仕方が違うのではないのか。死者数の表記を比べれば、日本は原子爆弾による感染症や後遺症を含んだ「被爆者」の数字になっているのに対し、合衆国は外傷による死者数が書かれている。ではなぜ、合衆国は外傷による死者数のみをデータとして選んだのか。それは「戦争を終了させるために使用した」武器だからではないか。「原子爆弾の投下は国民の安全を図るためだ。」と、合衆国の歴史の教科書には必ず書かれている。彼らにとっての原子爆弾は、銃などの武器と同じ目的を持ったものなのだ。原子爆弾が投下された事で、日本は降伏せざるを得なかった。日本が降伏した事で第二次世界大戦は終戦し、合衆国には安全が守られるようになった。終戦の道を築いた原子爆弾は、合衆国民を守るために使用した強い味方で、原子爆弾によるその後の日本人の被害者数の増加は、合衆国に意味を持たないのだ。しかし原子爆弾は、従来の武器とは根本的に異なるものである。実際、感染症や後遺症で亡くなった方も含めると、死者数は外傷による死者数の倍以上になるほど、その影響力は大きい。被爆者のみならず、その後の世代を担う子孫にまで被害が及ぶとも言われている。

「核兵器の無い世界」を創っていくには、唯一の被爆国である、日本という小さな国だけでは、なかなか大きな一歩が踏み出せない。共に平和を目指す世界中の人々と共に、何が出来るのかを話し合っていかなければならないのではないのか。今合衆国で生活している私は、日本と合衆国の架け橋になりたい。今年度、現地校で世界史の学習を始めた。後に第二次世界大戦、当然日本についての話も出てくるが、そこでは核兵器を持っている合衆国に、私が考える「平和」を伝えていきたい。まずは身近なところから、教師や、クラスメイト共に核兵器の恐ろしさに気付いて欲しい。戦争や、核兵器がどれほどどんなに人を傷つけ、苦しめるのか。戦争は二度と行ってはならない愚かな行為であり、平和がどんなに大切な事かを。そして、その平和な世界を目指すには「核兵器の無い世界」が絶対に必要だという事を。合衆国で生活する日本人として、アメリカ人の友人に日本で学んだ歴史を話してみたい。合衆国の現地校の歴史の授業で学んだ事を、日本で学んだ事と比較しながら、昔に何が起こったのか、これからの時代を創る上で「歴史」をどう解釈するのか、国籍を問わず同世代の友人と一緒に考えていきたい。お互いの学習内容を比べ、共有する事で、歴史認識の摩擦を減らせるはずだ。

世界の国々は、なぜ核兵器を生産するのか。果たして核兵器をなくす事は出来るのだろうか。いや、悩む前に行動しなくてはならない。核兵器を使用すれば、必ず相手国に大きな悲しみと苦しみを与えるものであるという事を、我々日本人は世界に伝えていかなければならない。今私達の世界は、グローバル化し、情報化がますます進んでいる。世界で唯一日本人が体験したこの悲劇を、外国の人々と共有するのはそう難しくないはずだ。人々が核兵器の恐ろしさに気付かなければ、この世界に平和は訪れない。しかし「核兵器の無い世界」を目指す人が増えて来た時、この世界はきっと変わる。「平和な世界」、「核兵器の無い世界」が見えてくる。世界が一つになれる。

